

日本ボストン会会報

発行所 日本ボストン会事務局

日本ボストン会20周年

顧問 吉野 耕一

日本ボストン会が20周年を迎えている。記念行事も色々企画されている。ここでは会の発足を振り返ってみる。

私がボストン日本人会会長を引き継いだ1991(平成3)年正月、副会長だった藤盛紀明氏が突然帰国を表明された。私の突然で無責任な反応は「帰国されたらボストン日本人会の支部のようなものをつくりませんか」だった。藤盛氏が「やってみましょう」と即座に反応されたのが日本ボストン会の始まりだった。

実は岩佐前会長の時ボストンにある日本からの建造物の修理支援を申し込まれたのが、当時の日本人会では何もできなかった事が頭の隅にあったのが、私の突然の反応になったと思える。

当時日本にはハーバード、MIT、エール会(医者)等が長年東京に支部をもっていたが、我々の目指す会は企業を含んだボストンに滞在した方々、ボストンを愛した方々総ての人たちの会として発足を目指して藤盛氏の活動が始まった。私は高エネルギー研究所との共同研究で少なくとも年一回は帰国していたので、多少の支援は出来た。

91年の帰国の際、前記会の代表者との会合を藤盛氏が企画して帝国ホテルに集まったが、当ホテルに診療所を持つ医師(集会場の責任者)の不参加でエール会以外の人たちと話を進めた。92(平成4)年初頭、日本人学校運営委員の土居陽夫氏の帰国で設立準備会の活動が急速に進んだ。

一方、ボストン日本人会役員会では顧問(元会長)の反対が多く審議が進んでいなかった。主な反対理由は募金活動だけで支部を作る必要性だった。

同時に日本側では、ボストン日本人会支部でなく、独立した友好団体としての発足を目指していたので、ボストン日本人会でも特に問題ではなかった。

日本ボストン会設立準備委員会世話人会(米田、藤盛、土居、神部、吉野)の呼びかけで設立準備委員会が1992年10月30日、東京工業大学大岡山キャンパスで55名の参加者で開かれた。「我が国と歴史的にも関係の深いニューイングランド地方との交流を促進し、日米友好の増進に寄与する」事と共に会員相互の親睦を計る目的で日本ボストン会は発足した。

日本ボストン会創立20周年記念行事(予告)

日時： 平成24(2012)年11月10日(土)午後2時~午後7時。
場所： NEC 三田ハウス芝クラブ (JR 田町駅、都営地下鉄三田駅下車)
港区芝5-21-7、 TEL 03-5443-1400
記念式典： 午後2時半開始(予定)。
記念講演： 顧問 吉野耕一(初代代表幹事)
記念出版披露： 会報掲載寄稿文・合本
「フェノロサ、ビゲロウと三井寺」
山口静一埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長
総会・記念パーティ： 午後5時開始(予定)

日本ボストン会の活動はホームページにてご覧下さい。 <http://www1.biglobe.ne.jp/~boston/>

紅葉狩りの会(11月27日)

辻 篤子

2011年度の紅葉を見る会は、都立殿ヶ谷戸庭園で行われた。JR国分寺駅から歩いて2、3分の所にある、知る人ぞ知る名園である。一歩入れば、駅周辺の喧噪を忘れさせる、別世界のような静けさに包まれる。天候不順だった影響か、紅葉は例年ほどではないとのことだったが、16人の参加者は、内部の高低差10m以上という園内をそぞろ歩きながら、視点を変えての紅葉狩りを大いに楽しんだ。

この庭園は、東京都立の文化財庭園九つのうちの一つであり、都指定の名勝でもある。高低があるのは、武蔵野段丘の南縁に位置し、立川市から大田区まで2.5*に及ぶ「国分寺崖線」と呼ばれる崖の一部を利用しているためだ。

もともとは1913(大正2)年から2年がかりで、後に南満州鉄道副総裁となる江口定條の別邸として作られ、29(昭和4)年には、三菱財閥の岩崎弥太郎の孫に当たる彦弥太が買収、以来、岩崎家の別邸として使われてきたそう。

その後、駅前の一等地とあって商業施設などを開発する計画が浮上し、それに対する住民の反対運動が盛り上がったという。結局、都が買い取って、1979年から有料庭園として開放している。竹林あり、湧き水あり、都内でもちょっと例を見ない和洋折衷のユニークな回遊式庭園である。よくぞ残ってくれたものだと、参加者からは感嘆の声がしきりだった。

食事会は、庭園からまた2、3分の移動で、駅ビル9階にある中華家庭料理の店「華琳」へ。

国分寺駅近くにある独立行政法人「情報通信研究機構」の広報担当の女性のアドバイスをもとに、藤盛幹事が事前に下見をして決めただけあって、料理もおいしく、気持ちのよい食事会となった。

窓側に位置する個室からの眺めが素晴らしいとのことだったが、人数が多すぎて個室には入りきれず。それでも、暮れゆく武蔵野の景色を少し離れた窓越しに楽しみながら、飲み放題のビールやワインなどがまたたくまに体内に吸収されていった。

食事会では、次回の紅葉を見る会の開催場所について意見が交わされた。ボストン会の紅葉狩りはこれまで、新宿御苑を皮切りに、駒込・六義園、奥多摩、神奈川七沢森公園、小石川後楽園、旧古河庭園、そして2010年の奥養老溪谷と、さまざまな名所をめぐるってきた。

そろそろ1泊旅行を企画しては、ということで、それぞれがこれまでに訪ねた紅葉の名所の中でお勧めの場所を披露した。東北地方から、鎌倉、京都まで、さらには、成田からのボストン直行便就航に絡んで、ニューイングランドの紅葉にまで話題はふくらんだが、結局、吉野初代会長のご提案による美ヶ原高原を候補とした。今回も実は、美ヶ原高原の旅を試みたのだが、すでにホテルが一杯で取れず、今回は早めに手配することになった。

散会后、駅ビルのエレベーター前で開催中だった青森ひばの展示即売会に吸い寄せられ、心地よい酔いも手伝ってまな板やひば油などを買って帰る結果に。その香りが八甲田の燃えるような紅葉も思い出させ、満ち足りた気持ちで家路についた。楽しい企画を立てて下さった、藤盛紀明、富美子さんご夫妻と水野賀弥乃さんに感謝したい。



紅葉狩り(殿ヶ谷戸庭園)

音楽の会 (報告)

第6回定期ホーム・コンサート

生田 恵子

秋の温かい日差しにつつまれた2011年10月9日(日)午後、関家の定期ホーム・コンサートに出演させて頂きました。

スイスに留学したとき室内楽を専攻した私は、ピアノのソロ曲を演奏するのが7~8年ぶりだったため内心大いに冷や汗をかいたのですが、今回は大沼岳彦さん(ピアノ)と堀子孝英さん(オーボエ)という、二人の頼もしい仲間達と共演でき、素晴らしい経験をさせて頂くことができました。

特に堀子さんとご一緒したプーランクのオーボエとピアノの為のソナタは、プーランク独特の、時に空虚で、時に重く、そのなかにも決して失われないパリ風の軽妙洒脱な雰囲気、オーボエの音がマッチした美しい作品で、演奏する私達もとても楽しんで演奏しておりました。演奏後に伺った、オーボエの音が秋の空気によく合っていて良い雰囲気だった、との感想もとても嬉しいものでした。

曲の解説中に『フランスと言うと、みなさん何を連想されますか?』と問いかけると、即座に『ワイン!』とお返事を返して下さる、そんなお客様のアットホームで温かな雰囲気にも大いに助けて頂いたと思っております。

もう一人のピアニスト大沼さんが演奏された、佐藤彰信さんの作品は私も初めて聴く曲でしたが、現代的な面白い作品で、皆様には私の演奏したシューベルトやリストといった、クラシックな作品とのコントラストもお楽しみ頂けたのではないかと思います。

そして演奏会後のビュッフェスタイルの懇親会。これは何よりもご褒美です! 実を言いますと、演奏会の前にリハーサルをさせて頂いているときから良いにおいが漂ってきていて、いやが上にも気持ちを盛り上げてくれました。

ホーム・コンサートと言う形式はまだ日本では少ないようです。お客様の反応をごく近くに感じられ、そして逆に演奏家の息遣いをお客様に直に感じて頂ける・・・こういう演奏会は、私達のように経験がまだ多いとは言えない演奏家たちにとって何よりの「修行の場」になります。

今回、演奏のチャンスを与えてくださった日本ボストン会の皆様、そして何より関様ご夫妻の素晴らしいお宅とお心遣いに、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

本当にありがとうございました。

観桜会のお知らせ

恒例のお花見の会をお知らせします。

今年も夕方の桜を楽しみたいと思います。

知人をお誘いの上ご参加下さい。

開催は4月8日(日)を予定します。申込締め切りを4月1日(日)にします。

*開催日時: 4月8日(日)午後5時。

*集合場所: 千鳥が淵、三井アーバンマンション前、

*交通機関: (地下鉄「九段下駅」下車
2番出口から徒歩約10分)。

*散策ルート: 千鳥が淵→靖国神社→武道館付近、自由散策(約1時間)。

*懇親会: ホテルグランドパレス
レストラン(カトレヤ)
(午後6:00~8:00)、
千代田区飯田橋1-1-1
(03-3264-1111)

*懇親会費: お一人6,000円。会費は事前送金をお願いします。

当日払いは釣銭不要をお願いします。

*費用払込先:

*申し込み先: 幹事 生田英機

懇親ゴルフ会報告・案内

1. 秋期の懇親会は11月17日(木)、すばらしい天気にも恵まれた川崎国際生田緑地ゴルフ場で12名が参加して開催されました。

結果は吉田博さんの初優勝でした。

2. 春期ゴルフ懇親会は下記の通り行います。

①日時: 4月12日(木)午前8:47アウトコース

②場所: 川崎国際生田緑地ゴルフ場

③プレー代: 16,000円チェックイン時に現金でお支払い下さい。このゴルフ場ではカードは使用できません。

④参加費: 4,000円、賞品代およびプレー後の表彰式をかねたパーティの費用です。

⑤人数: 4組16人分を予約してあります。

⑥プレー方法: 従来通り、ハンディキャップ戦。多くの方のご参加をお待ちします。

申込先: 山崎恒

日本ボストン会総会・懇親会

2011年11月18日(金)開催、於NEC三田ハウス芝クラブ

日本ボストン会の第19年度の総会は、NECの御好意により同社の三田ハウス芝クラブにおいて11月18日午後6時から開催されました。今年の総会には京都からご参加いただいたジャメンツ・登三子さんから京都ボストン交流の会の活動状況をお話いただき、久しぶりにご参加いただいた書家の矢萩春恵先生からは法眼健作会長の20数年前に戻ったボストン在勤時代の思い出話が披露され、ボストンで共に過ごしたことを思い出す機会になりました。お陰様で会員・ゲスト41名のご参加をいただきました。この機会にお世話頂いた方々に厚く御礼を申し上げます。(総会記録参照) 幹事 近藤宣之



日本ボストン会総会・懇親会

二〇一二年十一月十九日(金)

(敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|-------|------|-----------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 写真欠席 | 井口武夫 | 近藤宣之 | 朝熊滋之 | 鶴 正登 | 大沼岳彦 | 佐々木浩二 | 酒井一郎 | 三好 彰 | 法眼健作 | 土居陽夫 | 棚橋征一 | 佐藤信雄 | 関 直彦 | 滝沢典之 | 岡崎 宏 | 幸野真士 | 今脇夫人 | 中笠夫人 | 土居夫人 | 長島雅則 |
| | | | 茂木賢二郎 | 吉野耕一 | ジャメンツ・登三子 | 吉野夫人 | 当間夫人 | 廣瀬智子 | 藤盛紀明 | 山口静一 | 生田英機 | 侯野善彦 | 山崎恒 | 山崎夫人 | 酒井夫人 | 関夫人 | 藤盛夫人 | 近藤夫人 | 酒卷則子 | |
| | | | 篠崎史朗 | 侯野夫人 | | 吉野夫人 | | 法眼夫人 | 矢萩春恵 | | | | | | | | | | | |
| | | | 吉田 博 | | | | | | | | | | | | | | | | | |

「弘法山ハイキングの会」のご案内

開催日時：2012年4月1日(日) 午前9時30分(時間厳守)

集合場所：小田急線鶴巻温泉北口改札口、解散場所：小田急線秦野駅(チラシ参照)

幹事連絡先： 幸野真士

伝統芸能の会、歌舞伎観劇「三人吉三巴白浪」「奴胤廓春風」 2012年1月14日(土曜日) 於国立劇場

国立劇場開場45周年記念「平成二十四年初春歌舞伎公演：河竹黙阿弥作、松本幸四郎他の出演「三人吉三巴白浪」、「奴胤廓春風」の観劇会をご案内したところ、35名のご参加をいただきました。

当日は午前10時15分、国立劇場に隣接する新事務所棟3階の会議室に集合し、日本芸術文化振興会の茂木賢三郎理事長(日本ボストン会元会長)にご挨拶いただき、北潟様の歌舞伎についてのレクチャー(歌舞伎は論理的に理解するのではなく、心の感じるままに感性で楽しむのが良いとのこと)に感銘を受けました。この後、昼食を共にした懇親会では会員相互の親睦を深め、歌舞伎鑑賞では松本幸四郎父子孫三代の共演も堪能することができました。前回に続き、舞台が跳ねた後の舞台裏見学ツアーも楽しむことができました。

茂木理事長、北潟様、河原様、吉岡様には大変お世話になりました。改めて御礼を申し上げます。次回もまた、一人でも多くの会員の皆様のご参加をお待ちしております。

幹事 吉野静子、滝沢典之



伝統芸能の会(国立劇場)

二〇一二年一月十四日(土)

(敬称略)

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-----|-----|------|-------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 辻 篤子 | 三好 彰 | 鶴夫人 | 鶴正登 | 中埜岩男 | ヒロ・高田 | 生田英機 | 篠崎夫人 | 田部悟 | 吉野耕一 | 藤崎博也 | 篠崎史朗 | 森平幸一 | 酒井一郎 | 蛭名英逸 | 土居陽夫 | 関 直彦 | 佐々木浩二 | 菊池 徹 | 茂木賢三郎 | 藤盛紀明 | 三好夫人 | 中野夫人 | 侯野善彦 | 小野途子 | 酒井直子 | 酒井夫人 | 吉野夫人 | 侯野夫人 | 吉田 博 | 吉田夫人 | 滝沢典之 |
|------|------|-----|-----|------|-------|------|------|-----|------|------|------|------|------|------|------|------|-------|------|-------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|



THE JAPAN SOCIETY OF BOSTON, INC.

FOUNDED 1904

Showa Boston Institute

420 Pond St

Boston, MA 02130

Tel: (617) 522-0740

fax: (617) 522-0840

Grilli@JapanSocietyBoston.org

www.JapanSocietyBoston.org

From the desk of the Peter M. Grilli - President

2012 New Year Message to Members of the Nihon Boston-kai
From Peter M. Grilli, President, Japan Society of Boston

Dear BAJ Members,

It is a great pleasure to send all of you warm New Year greetings from Boston. I think often of the friendship linking the Nihon Boston-kai and the Japan Society of Boston. Our members deeply appreciate the friendship and support of the BAJ and we wish you well.

2011 dawned brightly, but it was soon enveloped in disaster. Japan's suffering in the long aftermath of the terrible events of March 11 remained in our hearts and minds throughout the year. Everywhere in the world, people were deeply moved by the strength and fortitude of the people of the Sanriku coastline of Tohoku, and were impressed with the determination of the entire Japanese nation to recover quickly. Such feelings were especially strong in Boston. I am proud that so many Americans – first the U.S. military forces and then ordinary Americans throughout this country – moved quickly to the support of Japanese friends. It revealed the depth of the friendship that links our two countries at every level. We know that the sense of friendship and support is mutual, and that the people of both countries will help each other wholeheartedly and without hesitation in times of need.

2012 has also dawned brightly, and with it our hopes and prayers that this year will be a much happier year than last. There are wonderful indications that Japan and New England will grow ever closer in the months and years to come. This year we will celebrate the 100th anniversary of the 1912 gift of cherry trees from the people of Japan to the United States. Those original cherry trees have transformed the Potomac Basin in Washington DC into a site of extraordinary beauty. This year, new cherry trees will be planted in many American cities, including Boston, as a symbol of the enduring friendship of Japanese and Americans. The springtime will also bring to Boston a long-awaited direct link to Japan, when Japan Airlines inaugurates its non-stop service between Boston and Tokyo. That will make it immeasurably easier and more pleasant for Japanese visitors to come to Boston and for the people of New England to travel to Japan. Finally, a wonderful bi-national "hero" – Bobby Valentine – has just arrived in Boston, and his presence here will transform not only the Boston Red Sox but will also be another strong *kizuna* or bond of friendship between Boston and Japan. Last week, the Japan Society of Boston hosted a reception to welcome Bobby to Boston, and he spoke movingly about his experiences in Japan and his deep affection for the Japanese people. I wish all of you could have attended that wonderful evening with Bobby Valentine at Fenway Park.

Continued on Page 7

マサチューセッツ州と桜のこと

日本ボストン会会長 法眼健作

私が総領事としてボストンに着任したのが1989年1月末のことであった。当時の知事はマイケル・デュカキス氏で、御存じのとおり大統領選挙でジョージ・H・ブッシュ氏と争った人物である。その頃は、もう地方政治家に戻っていて「日本側は毎年、桜の木を沢山寄附してくれるのが嬉しい」等述べていた。

谷口禎一総領事(故人)が日本のある文化交流財団とともに始めた桜の苗木の寄贈は、既に4年を過ぎており、一つの人気行事になっていた。

もちろん春の寄贈式には知事さんが夫妻で出てくれた。デュカキス氏の後の知事はウィリアム・ウエルド氏で、この人は共和党、マサチューセッツ州の名門の人物であった。奥様が大学の中国研究者で、また日本についても博識の方であった。ウエルド氏は一時将来の大統領候補とも言われた人であったが、共和党の人間としてはリベラル過ぎた由で、結局はいつの間にか政治の世界から姿を消した。この人も桜の植樹式には必ず奥様と出席した。桜という美しい日本の優しさを代表する花を誰しもが愛するのである。

それから10年近く経った。私はニューヨークで国連の事務次長を3年間勤めた後、大使としてカナダに赴任した。

着任後アメリカ大使に挨拶に行った。そこに居たのはポール・セルッチ大使、元マサチューセッツ州副知事であった。セルッチ氏はウエルド知事の下で副知事で、総領事であった私と仲良しだった。ポールは「ウエルドの後に自分が当選して知事になった。同期がテキサスのジョージ・W・ブッシュで、彼が大統領になったので、頼まれて大使としてカナダに来た」とのことであった。私にとっては誠に有り難い展開で、旧知の人物がアメリカの大使ということで、在任中は色々な面で助かった。ボストン当時の話になると桜の話になることもあった。

桜のことに話が及ぶと、誰でも機嫌が良くなりスマイルである。ただ一つ心残りなことは、寄贈先がマサチューセッツ州であるので、知事さんは受け取った苗木を州全体に配布する。

そうすると、ボストンに残るのは限られた本数になるので、一か所にまとめて植える効果に比べると薄くなる。だから仲々ワシントンのタイドル・ベースンのようにはならない。これが唯一のリグレットではあるが、見方を変えれば、この美しい花がマサチューセッツ全体で咲いているのである。これこそまさに Heart to Heart 外交であると考える。

2012 New Year Message to Members of the Nihon Boston Kai

Continued from Page 6

The Japan Society of Boston's gala Annual Dinner, on April 18, 2012, will highlight a "Sakura 100 Festival" that will symbolize many of our ties of friendship. I am delighted, and honored, to announce that the keynote speaker at the Annual Dinner will be Dr. Kazuo Inamori, Japan's visionary business leader who is currently Chairman of Japan Airlines, alongside his continuing responsibilities at Kyocera and KDDI. At the Annual Dinner we will also honor Ms. Wakako Tsuchida, the legendary wheelchair marathoner who has won the women's wheelchair Boston Marathon annually for the past five years. The Annual Dinner will be a truly festive event on April 18, and I hope some of you may be able to attend.

I hope that 2012 will bring many opportunities for our members to meet, either in Boston or Japan. We look forward to welcoming you here! With prayers for your continued health and good fortune in the months and years to come, and with warm wishes that we will meet again soon,

Yours sincerely,



Peter M. Grilli
President

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院 (X)

山口 静一

【42】遺骨の軍艦移送説

フェノロサの復権を願う余り、メアリには他にも幾つかの誇張した表現があります。一つは帰国後のフェノロサがコロンビア大学教授として比較文学を講じた、とフェノロサ遺著の序文に記したことで、これは後に十三回忌に東京美術学校に建てられた碑文にも明記されてしまいましたが、その事実はありません。この遺骨移送もその類いで、日本政府が遺体を引き取るために軍艦を派遣した話です。これはメアリからフェノロサ遺稿を譲り受けた詩人エズラ・パウンド(Ezra Pound、1885-1972)が1916年フェノロサと共著の形で出版した『能楽』(‘Noh’ or Accomplishment)の序文に述べられており、メアリからの聞き書きでした。

この箇所を、著名な英文学者矢野峰人博士が洋々社刊『日米文化交渉史』の一冊『学芸風俗篇』に紹介したのは昭和30年です。4年後博士は宝塚在住の岡田友次という人から「フェノロサの遺骨を迎えるために日本政府が軍艦を派遣したとあるが、それは如何なる文献に拠ったか」という質問状を受け取りました。出典の根拠を回答したところ、岡田氏は折り返し「それは事実と反する。遺骨は自分の友人で山中商会ロンドン支店の社員であった者が携え、シベリア経由で教賀に持ち帰ったものである」と書き送ってきました。実は岡田氏は当時山中商会社員でロンドンに在り、フェノロサの遺骨に関するいっさいの手続きを担当した本人でした。

2年後、この話に興味をもった同志社大学教授衣笠梅二郎はアメリカのメアリ未亡人に書を寄せ事の真偽を質したのですが、メアリはすでに1954年に死去しており、今はウオットリー夫人(Mrs. Whatley)となっている娘のアーウィンが母に代わって「遺骨を山中商会の社員がシベリア経由で日本に持ち帰ったというのは嘘である」と回答してきたのです。衣笠教授はこのことを研究社のリーフレット『英語と英文学』に発表します。

これを読んだ岡田氏は、今度は直接京都に衣笠教授を訪ね、在来の通説の誤りであることを告げると同時にウオットリー夫人に自ら手紙を書いて事の次第を知らせました。岡田氏によれば、実際に遺骨を携えて日本に持ち帰ったのは当時ロンドンで骨董商

を営んでいた加藤八十太郎だったということです。

岡田氏の詳細な説明にたいし、ウオットリー夫人は長年にわたる誤解が是正されたことを率直に感謝してきました。岡田氏は更にロンドンの出版社気付けでパウンドにも手紙を送ります。パウンドは戦時中スイスから反米放送を行ったことで戦犯に指名される恐れがあり、友人たちによって精神病院に匿われているとの情報もあって居所不明でしたが、予想に反しイタリアのティロロから丁重な返事が届きました。パウンドも『能楽』再版の際は当該箇所を是正する、と記していますが、これは実現しておりません。

以上は矢野峰人が事の顛末を雑誌『日本古書通信』(昭和39年8月号)に寄稿した一文の概略です。筆者はそれでも軍艦説にこだわり、「ウラジオあたりに停泊していた砲艦か駆逐艦が好意的に運んでくれたのではあるまいか」と結んでいます。

【43】ハイゲート墓地の記念碑

亡夫一周忌追悼会に出席しなかったメアリは、自宅で東洋美術に関するフェノロサ草稿の整理に没頭していました。亡夫のニューヨークでの連続講演 Epochs of Chinese and Japanese Art (1907) レジメを中核に雑多な旧稿や講演草稿を選択編集し、「遺著」として出版するのが目的でした。

漸く形を整えた原稿を携え、さらに訂正解説のため娘アーウインを連れて来日したのは1910年の春でした。原稿の修正は有賀長雄と、最も親しかった画家狩野友信が当たりました。

当然法明院に墓参したはずですが、それを記録した文書は未見です。

約2ヵ月の滞在の後母娘はロンドンに向かいます。能楽関係の草稿をパウンドに譲渡する話などもありましたが、ロンドンでメアリが最初にやった仕事は、ハイゲートの、一時埋葬してあった場所に記念碑を建てることでした。

碑文は下記の通りです。

HERE FOR A BRIEF TIME LAY
THE BODY OF
ERNEST FRANCISCO FENOLLOSA
LOVER AND INTERPRETER OF ART,

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

POET, PHILOSOPHER AND SEER,
 BORN AT SALEM, MASS. FEBRUARY 18TH 1853
 DIED IN LONDON SEPTEMBER 21ST 1908.
 HE RESTS NOW FOREVER, THROUGH THE LOVE
 AND LOYALTY OF JAPANESE FRIENDS,
 IN THE SPOT WHERE HE WISHED TO LIE,
 THE TEMPLE YARD AT MIIDERA,
 ON THE SHORES OF LAKE BIWA, JAPAN,
 THE STONE IS ERECTED BY HIS WIFE
 MARY McNEIL FENOLLOSA.

1975年私が初めてハイゲート墓地を訪れた時、この記念碑は墓地のほぼ中央、ちょうどカール・マルクスの墓の裏側に苔むして建っていました。後にマルクスの墓が立派に改装されて墓地の正面に移動した際この記念碑も移され、現在は奥の無縁地区にひっそり建っています。

【44】ビゲロウ、ハーバード大学で仏教を講義

ハーバード大学では、卒業生ジョージ・インガソルの遺志により5000ドルの基金で「霊魂の不滅」をテーマに毎年「インガソル講座」が開講され、講義録をホートン・ミフリン社から刊行していました。1908年、ビゲロウはこの講座に依頼されて仏教論を講義、『仏教と霊魂の不滅』(Buddhism and Immortality)が出版されています。かつては桜井敬徳から直接、のちに直林敬円との文通によって研鑽を積んでいたビゲロウは、すでにアメリカにおける日本仏教研究の第一人者と目されていたのです。

わずか76ページに満たぬ小型本ですが、北方仏教の説明から始め霊魂不滅、永遠の生を「涅槃(ニルヴァーナ)」に求める仏教の理念を、デカルト、エマソンなど西洋思想を例にひきながら、ビゲロウの仏教理解を聴衆に伝えようと試みた講義でした。終わりの方で彼は

「分けのぼる麓の道は多けれど同じ高嶺の月を見るかな」

という日本の古歌を紹介しています。一般には、宗派は異なっても目指すところは同じ、と解釈される歌と思いますが、ビゲロウは別の捉え方をしています。麓の道すなわち登攀する山を彼は「物質世界」と考え、頂上は物質世界の生んだ「意識」によって人間が個的存在を維持して立ち得る最高地点、「意識」の最高形態「多くの求道者が安んじて留まる崇高な境地」と解釈しました。「眼下の俗界、天上の星空を求道者が共に把握できる」地点、其処までは他

の宗教・哲学でも到達できる究極の境地であると。しかし、とビゲロウは続けます。「仏教はさらにその先を見る。俗界の更に下、星空の更に上に、両者を包括する天空が存在する」、そこには「物質世界では得ることのできない平安」「物質で学んだ理解を越える平安」がある。「無限の意志と無限の意識が一体化した平安」この静寂の境地こそ《ニルヴァーナ》である」。これが講義の結論でした。果たして一般聴衆は理解することができたでしょうか。

なお1908年は10月から12月まで、インガソル・レクチャーに引き続いて8回にわたる仏教講義を開いたことが“The Harvard Crimson”紙に記録されています。(本会会員三好彰氏よりの情報)

【45】ビゲロウ、ウインズロウ、アネサキ

ビゲロウは大学だけではなくボストンの私邸やガードナー夫人の邸宅でもしばしば仏教講話会を催したようです。

1922年はビゲロウ72歳の年ですが、1月から2月にかけて7回にわたる仏教論議の記録が前述ホートン・ライブラリーに保存されています。タイトルは「ビゲロウ仏教ノート」とありますが、仏教に関する二人の質問とビゲロウの回答を、同席したビゲロウの秘書が記録したもので、寄贈者はMrs. Frederick Winslow (後述)です。天台・真言の密教のみならず仏教全般についてのビゲロウの理解を示す貴重な資料です。(興味あるエピソード1件。悲母観音像と聖母信仰との関連で談たまたま狩野芳崖に及び、「芳崖は売れたが橋本雅邦は無名だった。そこでわしは雅邦に毎月給金を払って、作品を購入した」と回想している部分があります。フェノロサも20円の月給で芳崖を雇い制作させていました。)

質問者はDr. W. Mrs. W.とのみ記されていますが、Dr. Frederick Bradlee Winslow (1873-1937)と夫人Mary Williams Winslow (1875-1970)と思われる。ドクター・ウインズロウはボストンの著名な内科医でビゲロウの後輩。ビゲロウ邸(56 Beacon Street)のすぐ近く(256 Clarendon Street)に住んでいました。10年前大病を患ったビゲロウの主治医だったのかもしれませんが。ウインズロウ夫人はスイス、イギリス、フランスに留学して古典ギリシャ研究を専攻した教養豊かな女性で、ハーバード大学哲学教授サンタヤーナ(George Santayana, 1863-1952)の近い友人でした。(この項、三好彰氏のご教示による)

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

ビゲロウの回答中、しばしばアネサキの見解が引用されています。東京帝国大学教授(宗教学)姉崎正治(1873-1949)がハーバード大学日本文明講座に客員教授として招聘されたのは1913・14(大正2、3年)の2年間です。姉崎は「日本宗教史」を本講義として2年間、他に「仏教各派の思想」「詩と宗教」「仏教美術と仏教理念」などを講義しています。後者はMFAでの出張講義でした。ビゲロウはこれらの講義を介して姉崎と接触し質疑を交わしたに違いありません。

【46】ビゲロウの死と法明院への分骨

1926年(大正15年)10月6日、MFA理事ビゲロウは76歳で死去しました。遺言により寄託中の美術品はすべてMFAに寄贈されました。フェノロサ旧蔵品をはるかに凌ぐ数万点のビゲロウ寄贈品が、現在MFA日本美術の中核を成していることは周知の事実です。

遺骸はトリニティ教会の儀式に則り、ハーバード大学の東方ケンブリッジのマウント・オーバン墓地に葬られましたが、遺言により天台教学の徒にふさわしく遺体を密教の法衣で包み、左手に愛用の数珠を掛けて葬ったと言います。(『MFA100年史』)。

ビゲロウもまた、かねてから法明院への埋葬の念願を山中商会の代表山中定次郎に語っていました。山中は関係者の了解と法明院の許可を取り付けた上、墓石、灯籠、玉垣の築造を京都の石材商石恒(佐脇恒吉郎)に依頼、1年後の昭和3年2月16日、分骨と遺品を携えて横浜に帰着しました。遺品の中に敬徳(敬円の誤りか)阿闍梨から贈られた金襴の袈裟や不動明王の掛物、水晶の数珠、托鉢などがあったことを、翌日の『大阪朝日新聞』は伝えています。

山中定次郎はこの時、貧弱だったフェノロサの墓域の改修をも併せ行い、昭和3年4月27日、その竣工とフェノロサ、ビゲロウ追悼を兼ねた記念の大茶会を催し、招請した故人の知己友人始め多数の名士と共にその霊を慰めています。(『山中定次郎伝』)

【47】ジェームス・H・ウッズ博士のこと

ハーバード大学でのビゲロウ仏教講座聴講者のなかに、同大学サンスクリット語教授ジェームス・ホートン・ウッズ(James Haughton Woods, 1864-1935)がいました。絶対者との合一を目指すという

ヨーガの著名な研究者で主著“YOGA - SYSTEM OF PATANJALI”(1927)があります。ウッズは霊魂不滅をニルヴァーナに求めるビゲロウを仏教研究の師と仰いで熱心に聴講。師から天台学について作成されたノートに託されていました。

前述姉崎正治とは、かつてドイツで留学生同志として知り合い、その後家族ぐるみの親交を結んでいました。ハーバードへの姉崎招聘も、「ウッズの尽力による」ものだったと姉崎は自伝『わが生涯』で語っています。関東大震災で倒壊炎上した東京帝国大学図書館再建の隠れた援助功労者もウッズでした。当時兼任で図書館長だった姉崎教授は、同書で「再建の寄付はウッズの周旋に待つ所が多かった」と回想していますが、ハーバード大学からの多大な図書寄贈に加えて、ウッズの弟アーサーは図書館再建の建設費400万円を寄付したロックフェラー財団の有力理事だったのです。姉崎はアーサーとも熟知の間柄でした。

ウッズはハーバード大学を定年退職したのを機に、今や三井寺に眠るビゲロウから渡された天台密教ノートを整理出版し、かたがた自分も天台学研究に後半生を捧げるつもりで、夫人同伴来日しました。1934年(昭和9年)12月14日のことです。

姉崎はウッズの仕事の補佐を、ハーバード時代に助手として帯同した矢吹慶輝(1879-1939)と岸本英夫(1903-1964)に依頼しました。前者は大正大学学長、後者は姉崎の教え子で女婿となった若き宗教学者、ハーバード留学時代にウッズのお世話になった一人です。

二人の専門家はウッズに是正を依頼したというビゲロウのノートを見て吃驚します。ビゲロウと阿闍梨との真剣な問答はよく分かるのですが、英語を知らぬ阿闍梨と仏教に疎い通訳者により、天台学がきわめてミステリアスな信仰となっていること、また死後の世界、霊魂説への関心が異常に強く天台学の本質から外れていること、などでした。まずこの部分の訂正から始めなければなりません。天台密教に造詣の深い浅草寺の清水谷恭順師がウッズの顧問インストラクターに選ばれます。講義は1月中旬からと決まりました。

【48】ウッズの急死 法明院の供養塔

正月の休みが終わって9、10、13日の3回、帝国ホテルのウッズの部屋で天台学予備講義が、矢吹講述、岸本通訳の形で行われます。ウッズを大いに満足させたこの予備講義が終わった翌14日の昼

フェノロサ、ビゲロウと三井寺法明院(X)続き

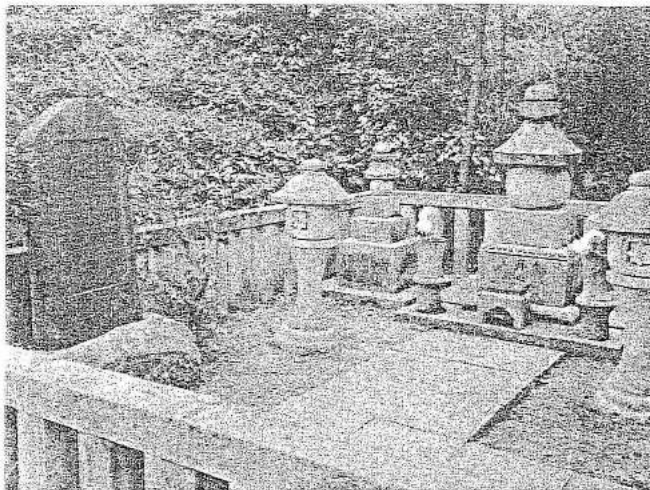
過ぎ、大学の岸本に突然電話が入り、ウッズ急死の知らせが飛び込んできたのです。脳卒中、71歳でした。

17日青山のトリニティー教会で告別式。姉崎正治は長年にわたる交遊を胸に秘めて弔辞を捧げ、法華経の一節をサンスクリットで誦唱。桐ケ谷で火葬されました。

遺骨が日本を離れる前にということで19日、仏式の葬儀が浅草寺で営まれています。友人以外に個人と面識のない著名な仏教者たち数十人が参列、異郷で急逝したアメリカの仏教学者を哀悼したことが、岸本英夫を感激させます。(岸本 'Professor Woods and His Last Visit to Japan' "Harvard Journal of Asiatic Studies", April 1936)

1月15日の『東京朝日新聞』はウッズ博士の急逝を詳しく報じています。末尾に「姉崎博士の談」として「・・・遺骨の一部は師(ビゲロウ)の眠る三井寺に葬ろうと、今考えている所です」を載せています。

ウッズの一周忌、法明院ビゲロウの墓域の中に、ビゲロウに寄り添うようにウッズ供養の五輪塔が建てられました。



法明院 ビゲロウの墓域

【49】おわりに

長い間のご愛読ありがとうございました。思えば2007年5月25日の日本ボストン会有志による法明院参拝がキッカケでした。あの時、病気を押しつけて接待された滋野敬淳大阿闍梨も故人となられました。

フェノロサ、ビゲロウの墓が法明院に作られた経緯については、主として旧著『フェノロサー日本文化の宣揚に捧げた一生』(上下巻、1982年、三省堂)に拠り、その後の著述や蒐集した資料によって補足したのですが、当時ビゲロウの墓域にあるウッズの供養塔には全く関心がありませんでした。ウッズ最後の訪日の事情やビゲロウの仏教ノートの存在は、本会会員三好彰様のご教示に負う所大なるものがあります。この場を借りて感謝申し上げます。また5校、6校に及ぶ修正に辛抱強くお付き合い頂いた編集の俣野善彦様にも謝辞を捧げます。ありがとうございました。

書き終えて改めて感じるのは因縁の不思議さです。ウッズが天台学に興味を持ったキッカケがビゲロウだったこと、ウッズの友人姉崎正治はフェノロサの教え子だった井上哲次郎直系の後継者であったこと、また姉崎を継いだ宗教学者岸本英夫の父は、明治30年11月フェノロサが東京専門学校(現早稲田大学)で講演した「東西文明の比較一斑」で通訳を務めた高等師範学校教授岸本能武太だったことなど。岸本英夫先生の講義には、私も専攻学科は違っていました。が聴講したことがありました。謹厳な感じの先生でした。先生の編纂された『明治文化史 宗教編』(昭和29年)は、裨益する所の大きかった著作です。

2010年9月15日

(埼玉大学名誉教授、前名古屋ボストン美術館長)

名古屋ボストン美術館： 特別企画展「ボストン美術館 日本美術の至宝」(予告)

前期： 2012年6月23日(土)～9月17日(月・祝)

後期： 2012年9月29日(土)～12月9日(日)

*9月18日(火)～9月28日(金)は展示替えのため休日

問合先電話： 052-684-0101

総 会 記 録

日時：2011年11月18日(金)午後6時～8時
 場所：NEC三田ハウス芝クラブ
 議事：会長挨拶、会員紹介、活動報告、会計報告。
 出席者：41名
 遠隔地出席者：京都・ジャメンツ登三子。
 会員紹介：広瀬智子(鶴正登)、大沼岳彦(関直彦)
 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

総会は定刻に、近藤宣之副会長の司会で開会しました。まず、法眼健作会長からは「今年はEU加盟国の中の財政不安による経済不安、我が国の東日本大震災による経済の不振などで苦しい年でした。

我が国の人口は現在の1億2千600万人が、2050年には9千600万人になり、毎年75万人以上の減少が見込まれている。賢明なる日本人は、世界のハイテクの工場として生き延びて行く必要があり、一生懸命に努力することに務め、来年が良い年になることを祈っている」とご挨拶されました。

長島雅則次期会長からは、母校MITの創立150周年行事に合わせた、日本MIT会の創立100周年行事の11月11日に来日されたSusan Hockfield学長を迎えて記念パーティを開催、記念講演には島田晴雄先生(千葉商科大学学長、慶応義塾大学名誉教授)から岐路に立つ日本にとり、現在は戦後50年の経済のひずみを正す必要があることを説かれた話を紹介されました。

これまでの当会の歴代の代表幹事、会長を務められた吉野耕一顧問、茂木賢三郎顧問、佐々木浩二顧問からご挨拶を戴き、乾杯を鶴正登前会長にお願いしました。鶴顧問は都合でご欠席の事務局の代わりに、制作された当会の旗を掲げ披露されました。この後、食事と共に懇親の場に移りました。

暫時懇談のあと、ご参加の方々からそれぞれ自己紹介をされて、会は盛り上がりました。

*会計報告：山崎規矩子会計幹事から書面にて報告：
 収入之部：(含繰越金) 702,408円
 支出之部： 337,463円
 残高(次期繰越金)： 364,945円
 ようこそ特別会計残高： 1,042,150円
 ボストン会資産： 1,407,095円
 最後は、酒巻則子さんのキーボードの伴奏で、「見上げてごらん夜の星」、「もみじ」を合唱、藤盛紀明副会長が明年は当会の20周年を迎えるとのことご挨拶のあと、三本締めで閉会しました。(俣野善彦記)

日本ボストン会の旗披露



幹 事 会 記 録

日時：2012年1月12日(木)午後6時半～8時半
 場所：新宿サミットクラブ
 出席者：22名
 XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

*法眼健作会長挨拶：日本ボストン会創立20周年行事企画が進められている、宜しくお願ひしたい。
 *長島雅則次期会長：MIT関連でボストンに行く機会が増える。

*事務局報告：新入会員なし。
 *藤盛紀明副会長：第1回の委員会を12月8日に開催、記念行事と総会を11月10日(土)午後2時から午後7時まで開催したいと提案あり。

記念講演、記念出版(山口静一先生の会報寄稿の合本制作) イベント・グッズの制作、等々。
 (別項掲載予告記事参照)。

*「ボストンへようこそ」販売状況の報告。
 現在の手持ち6冊。インターネットで情報が取れる時代で、今後の販売は期待できないと報告あり。
 *一繕乃会：「ファミリーハウス」ボランティア活動に関心のある方の参加を希望する。

*美術と歴史の会：岩崎家の静嘉堂文庫美術館(世田谷区)の見学・鑑賞を企画。(10月予定)
 *紅葉狩りの会：美ヶ原 10月13～14日(土～日) 予約は半年前に申込みが必要。目下受付中。

(同封チラシ参照)
 *お花見の会：(別項参照)
 *音楽の会：ホーム・コンサートは今後、年一回にしたいと報告。次回は5月20日。(チラシ参照)

*ゴルフの会：(別項参照)
 *ハイキングの会：同封チラシ参照
 *伝統芸能の会：(別項参照)
 *会報発行：1月末締切、3月初めに発行予定。
 *次回幹事会：6月22日(金)

2012年日本ボストン会イベント

- | | |
|--|---|
| *4月1日(日).. 弘法山ハイキング
*4月8日(日)... お花見の会
*4月12日(木).. 懇親ゴルフ会 | *5月20日(日)... ホーム・コンサート
*10月13～14日(土～日)紅葉狩り(美ヶ原)
*11月10日(土)総会・20周年記念行事 |
|--|---|